

受給者:C2166092

柯燁佳 (KE Yeja)

所属:上智大学大学院グローバル・スタディーズ研究科国際関係論専攻博士後期課程
1年

研究課題: ベトナムヌン族の移動(禁止)から見られる中国辺境地帯における国家
権力の変動過程

今回の調査では中国広西省碩龍鎮大新県崇左市徳天村とベトナムカオバン省ダムトイ社間の中越国境線に注目して、両側で生活している同系の民族である中国壮族(ベトナムヌン族)をめぐるコロナ時期前後における越境禁止の事例から中国の辺境地帯における国民国家パワーの変動過程を検討する。

両村の村民はパスポートなしで辺民証の提出のみで碩龍鎮入境口に通過できるという辺境政策がある。しかしながら、徳天村はダムトイ社と隣接しており、両地は幅約10メートル国境の川で隔てられているだけであるから、両村の村民は一般的に方式的な越境方法を使わずに、川を小船で跨って越境することが多く利用されている。両村で生活している同系の民族は民族祭りへの参加や、親族と会うこと、出稼ぎ、結婚移住などを目的とした非法越境を頻繁に行ってきた。

しかしながら、頻繁な移動の背後には、国家権力の象徴である国境警備隊、辺境警察と役場が日常生活において効力を発揮しきれていない状況がある。詳細を以下のように述べていく。

まず、筆者は今回の調査により、国境線は特定の状況下のみ存在しているということを見出した。まずは、国家権力である国境警備隊が機能していない。実際には非法的な越境が黙認されている現状がある。結婚移住した女性や出稼ぎで頻繁に越境する人々に対しては、越境の許可が隊員の主観によって甘くなったりすることもあるようである。次に、徳天村に結婚移住してきたベトナムヌン族女性は徳天村の全人口の11.2%を占めている。彼女らは実際に事実婚姻をする非法滞在者なのであるが、徳天村の男性結婚難という背景から辺境警察や地元政府に黙認されている。このようにこの両者に関しても国家権力としてよりも村落社会的な機能が強いように思われる。このように、本来国家権力であるべき中国の国境警備隊、辺境警察庁、役場などが実際には村落社会を維持するために機能していたのがコロナ以前の現状であった。

しかしながら、コロナ時期において、徳天村に国家権力の影響が強まった。中国徳天村とベトナムダムトイ社間の人の移動、物流などが一切に禁止された。民族祭りの参加、親族と会うこと、越境貿易などが全て禁止された。

国境線の場合で言えば、以前は自由に越境することができた国境線は現在通過することができない。効力を増加するために、徳天村に駐在する軍隊は多くなった。川辺、山など中越辺境を越えるところには、臨時監察所が設立され、24時間監視が行われている。実際に、国境を越えるベトナム人辺民または荷物が発見されたら送還される。のみならず、以前はベトナムヌン族のことを歓迎していた徳天村民は今、辺境間の川でベトナム側から川を越えて徳天村に向かっているベトナム人を見たら石を投げる。徳天村民は越境してくる彼女らがコロナウイルスを蔓延させると考え

ているからである。

コロナ禍以前、以後でベトナムダムトィ社と徳天村をめぐる状況は大きく変わった。以前は国境警備隊、役場、警察などの国家権力も越境してくる彼女らを徳天村の村落社会の一部としてみなしてきた。しかし現在のコロナ禍における人流や物流の制限に見られるように国民国家の権力が徳天村の従来村落社会の秩序を変えるまでの影響を及ぼすようになったとすることができるであろう。